

第2章 授業で勝負する

第4節 授業記録を読む（付録）

この節は、以下の4項で構成しています。

■授業記録を読む「総合」■

■授業記録を読む「文学」■

■授業記録を読む「説明文」■

■明日の授業を作る■

◎「学びの共同体」を作る

◎【補説】「学びの共同体」をめざして

◎説明文と文学の授業を作る

【補足】2014.1.1

◎「学びの共同体」と「授業のUD化」で子どもたちの学びをつくる

【付録】2014.4.1 ← 今回の追加分です

◎「島ひきおに」

■明日の授業を作る■

◎「島ひきおに」

投げ込み教材です。今回の授業記録は、保護者向け「授業通信」によって紹介します（B5版の文書をA4用紙にコピーしましたので、体裁が崩れています）。

なぜ「島ひきおに」なのかについては、授業通信の冒頭に簡単に書いていますが、授業記録の後に詳述します。

おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その1)

2月の初めに、節分&立春句会をしました。子どもたちの俳句を紹介した「わかば」に、「おには内」のことを書きました。その時から、鬼を主人公にした作品で授業をしようと準備をしてきました。

先週から、国語や道徳の時間に授業をしているのですが、子どもたちの反応が実に楽しいのです。担任の独り占めは勿体ない気がしますので、授業通信としてお伝えしたいと思います。



島ひきおに

山下 明生・文
榎山 俊生・絵

なんぼかむかしのはなしじゃそうな。□
 ひろいうみのまんなかに、ちよこんと小さな島があつて、それはそれはおそろしいおにがすんでいたそうな。□
 おには、島のてっぺんにこしをおろし、足をなみにひたしては、まいにちまいにちうみのむこうをながめていた。□

一つ つんでは ちち こいし □
 二つ つんでは はは こいし □
 三つ つんでは ひと こいし □
 けむくじやらのうでをのぼし、すなはまの石をつみかさねては、まいにちまいにちうたつておった。□

たまたま、空をわたるとりをみると、□
 「おーい、こつちやきてあそんでいけー」 □
 たまたま、おきをとおるふねをみると、□
 「おーい、こつちやきてあそんでいけー」 □
 なみがうなるように、よんでおった。 □
 だが、おにのいる島になんぞ、だれもよりつきはせん。 □
 おには、まいにちまいにちひとりぼっちでさびしかった。 □

教材文は、パソコンで作成して1枚ずつ渡しています。前ページにあるのが、その1枚目です。この場面では、1文だけウソを書いています。それを見つけさせました。

4人の子は、3行目の「それはそれはおそろしいおに」がウソだと言いました。そして、3人の子が、最後の

「さびしかった」が本当はいらなと言いました。(意見が割れるとワクワクします!)

4人は、「父恋し…」という歌、「おーい、…」というせりふ、挿絵の目を根拠に、これは「やさしいおに」「ひとりぼっちのおに」だと主張しました。

3人は、3行目の文も根拠にして、おには恐ろしいものなのだから、「さびしい」というのは変だ」と主張しました。

山下明生さんの原作は、「ちよこんと小さな島があつて、ひとりぼっちでおにがすんでいたそうな。」となっています。4人が見事正解です。

の場面と全く同じ顔ぶれです。

■食べない、乱暴なことをしないという条件で、一緒に暮らす方向で話が展開 … 4人

■とにかくその場を逃れ、鬼の島から離れるという展開 … 3人

漁師たちの答えは、3人の子どもたちと同じでした。口からでまかせを言う漁師と、律儀に礼を言う鬼。なんとも寂しい擦れ違いです。

おに

「うみは、だんだんにふかくなる。」
「おには、ちよんびりちよんびりからだをのぼし、うみのなかをあるいていった。」
「えんやこらえんやこらあるいていった。」
「うみがあさ日にそまるころ、ようやくおには、はまべの村までやってきた。」
「おーい、島ひっぱってきたぞ。こっちやきてあそんでいけ！」
「おには、なみがうなるようにみんなをよんだ。」
「おーい、こっちやきてあそんでいけ！」
「なんと、おそろしいことになったものじゃ。はまのまんまえにおにの島があつては、りょううにもでられん。」
「村びとたちは、あたまをかかえてそうだんした。」
「どうでもこうでも、おににほかの村へいつてもらわにや。」
そして、やせっぽちの村びとが三にん、おにのところへでかけていった。



「これがこれは、ほんまにええことおしえてもろた。あらしがやむまで、せいせいやすんでいけや。」
「きだして、りょううしたちにおれいをいった。」
「つぎの日から、おにはひっこしのしたくにかかった。」
「さいしょの日は、島のそこをずっこずっこけずった。二日めには、ふどいつなで島をしぼった。そして三日めのばん、おにはとうとう、島をひっぱってあるきだした。」
えんやこらえんやこら、うみのなかをあるいていった。

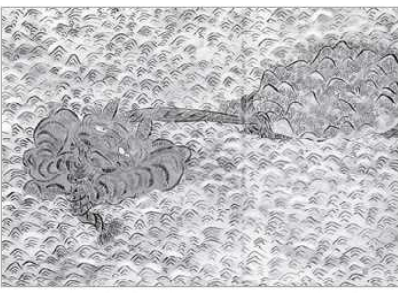
今度は、鬼が島を引っ張っていった続きを考えました。

■一緒に暮らすことになる … 4人

■一緒には暮らせない … 3人

人数は4対3のままですが、ここで下谷さんと畑中さんが立場を変えました。

いよいよ次は、最初のヤマ場になります。



「わしらの村はびんぼうで、みんながいにほねとかわです。たべてもおいしゅうはありません。どうぞ、ほかのところへいってくれんさい。」
「たべたりはせん。いっしょにあそびたいだけじゃ。」
「おには、足をふみならしていった。」
「いや、みんなはらがべこべこで、あそべるものはひとりもいません。どうぞ、ほかの村へ……。」
村びとたちは、わざとにそうなこえをだしてたんだ。



おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その3)

「わかば」前号に掲載の教材文の4枚目は、四角い枠の部分が印刷されていません。村びと、おに、村びとの順に話し言葉を考えました。

やせっぼちの村びとを送った村人たちの意図(作戦)を汲んだ展開は、次の4つでした。

■皿木■

「このように、わたしたちの村には、やせてるやつらしかおりません。あなた様には、もっと大きくて、おいしい人間のほうが、お口に合うと思いますよ。」

「そんな、わしはただみんなとあそびたいだけで…。」

「こんなやせてるやつらは、おに様とあそぶなんて、ひとつもできません。ほかの村の方たちは、きっとあそべると思いますよ。ほかの村にいつてみたらどうですか。」

■吉村■

「おにさん、わたしたちはやせっぼちだからおいしくありません。だから、ほかの村へいつてください。」

「たべるきは、ない。ただみんなとあそびたいだけや。」

「でも、ほかの村の人のほうがいい人ばかりですよ。」

皿木さんと吉村くんの展開はパターンが同じです。鬼は人間を食べようとしているのだから、食べ甲斐のない痩せた人間を送った村人の意図がはっきりと読み取れます。原作はほぼこれと同じです。

■牧志■

「このようなわたしたちのほかにもたくさんいて、まえにおにの島があるとりょうにいけなくなってもっとやせっぼちになって、うごけなくなってしまう。ですから、島をほかのところにおいでください。」

「あそべなくなるのならしかたがない。でも、どこに島をおくんだ。」

「それなら、となりの島ならひろいので、おにの島もおけると思います。そこで島をおいで、またここにくるとよいですよ。」

牧志さんは、迷惑論を展開します。ただ、これで納得してもらえらるなら、鬼は結構「お人好し」だということになるのですが…。

■奥村■

「あの、この島はちょっとせまくて、村人たちにめいわくです。ほかにいってください。」
「だめじゃ。わしはこの島がきにいったのじゃ。いちどだけはなしあえばいい。」
「ふむ…なるほど、分かりました。話し合しましょう。」

奥村くんは、ハッピーエンド型展開です。ここまで奥村くんの立場は終始一貫「おに＝善人」です。そして、「話し合い」という言葉がいつも登場します。

あとの3人は、鬼を追い払う展開です。ただ言葉が直截的で、鬼を怒らせてしまいそうです。「あなた様」「お口に合う」などという慇懃無礼な表現は、どこで身に付けていくのでしょうかね。

大人になっていくというのは、人と上手に付き合う術を身に付けていくことでもあるのですが、心と遊離したコトバって空しくて気恥ずかしい限りですね。



おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その4)

「わかば」56号に掲載の教材文の4枚目、四角い枠の部分印刷したものを配って、授業は次に進みます。

「たべたりはせん。いっしょにあそびたいだけじゃ。」おには、足をふみならしていった。

●「足を踏み鳴らして言った」鬼の心の叫び

■奥村■「まったく、おまえらはどうしておれのきもちがわからないのじゃ。」(イライラした気持ち。自分も同じ気持ちになることがある。)

■皿木■「なんで分かってくれないんじゃ。食べたりなど、するわけないじゃないか。」

■下谷■「たべようなんて思ってないのに、かってにきめつけないでほしいな。」

■中井■「なぜ人間はかってにきめつけるのかなあ。やっぱりあそびたくなくなってきたなあ。」

■畑中■「どうしてわかってくれないんだ。たべないぞ、おれはあそびたいだけじゃ。」

■牧志■「どうしてわかってくれないんだ。ぼくは、ほんとうにたべないよー。」

■吉村■「どうしてわかってくれないんだ。たべないのに。」

「自分も同じ気持ちになることがある」という奥村くんの言葉は重いです。

●作戦を立てておにを追い払った村人をどう思うか

■奥村■村人たちがおにのことをわからないから、むかつく。

■皿木■おには島をひいてまで来たんだから、ちょっとぐらい遊んであげればいいのに。そんなにイヤだったら、食べたり、らんぼうなコトをしないとやくそくしてから、あそべばよかったじゃん。

■下谷■なにもたべようとしなのに、おにをおいだそうとしている村人を、ぼくはあんまりよくないなあと思いました。あそんであげてもいいんじゃないのかなと思いました。

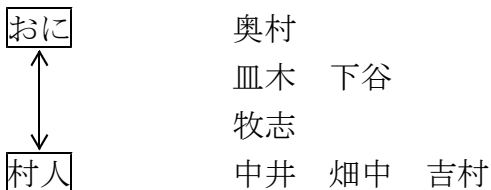
■中井■じっさいにおにはこわいから、おにをおいだそうとしてあたり前だと思う。

■畑中■村人たちはよくひっしにさくせんをかんがえて、おにをでていかせている。

■牧志■ほんとうにおにはわるぎがないのに、村人はおにに島からでていってもらえばいいだけだし、うそをついてきづかれたらどんなめにあうか。すこしぐらいあそんであげてもいいんじゃないかなのかな。

■吉村■いいと思う。

ここにきて、子どもたちの立ち位置がぐらついてきました。



図示すると、こんな感じでしょうか。

立ち位置の変わらないのは、奥村くんただ一人。ずっと、鬼の気持ちに寄り添っています。

皿木さん、下谷くん、牧志さんは、鬼の側に立ち位置が移ってきました。逆に、中井さん、畑中さん、吉村くんは、村人の側に立ち位置が移ってきました。なぜそうなのか、現段階でははっきりとは分かりません。

物語は、次の場面に進みます。その時、子どもたちは…。




おうちの方へ特集号

「島ひきおに」 授業通信(その5)

おに

「おーい、島ひっぽうてきたぞ。こつちやけー」
おには、なみがうなるようにみんなをよんだ。
その村でも、そうだんがはじまった。
「どうでもこうでも、ほかの村へいってもらわにゃ」
そして、いちばん年とったじいさまが、つえをつきつきおにのところへでかけていった。
「わしひとりだけをたべて、ほかの村へいってくださらんか。わしのほねは、あしたむすこがどりにきますけん。」
「たべたりはせん。ただあそびたいだけじゃ。さけでものんで、ゆつくりとまっていけや。」
おには、よろこんでよろこんで、じいさまといっしょにねた。



この場面では、四角の枠部分を予測した後、お話の続きを書きました。

■奥村■

「わしはいっしょにねたくありまへん。こんなことしているばあいではありまへん。もうこんなのうんざりです。もうどっか行ってください。」

「いいかげんにしろや。わしはなあ、おまえらをたべにきたんじゃない。人間となかよくなりてん。だから、いっしょにくらしましよよ。」

「はあ、もうわかりました。いっしょにとまりましよう。」

■牧志■

次の日になって、おには、目をさました。おには、きのう、じいさまに言われたことを思い出した。おには、村を出ようと思った。そして、島をひっぽろうと思うと、じいさまがいて、「いくところがないのなら、いくところが見つかるまで、ここにいていいぞ。」と言ったので、おにはじいさまの言ったとおりに、いくところが見つかるまで村にとまった。

■皿木■

次の日、おにが、まだねているじいさまにさげんだ。「おーい、起きろ!!はやくあそぼうじゃないか!!」じいさまは、まだしばしばする目をこすりながら、おにといっしょにあそんだ。しかし、すぐにつかれきって、ぐうすかぴいすかねてしまった。あそび相手がいなくなったおには、ちょっとでもあそべてよかったと思い、島をひっぱり村から出ていった。

以上の3人が、程度の差はあれ鬼を受け入れる展開です。以下の4人は、鬼を拒みます。下谷くんの立ち位置が、再び村人側に動いています。

■中井■

「すみませんが、いっしょにねたのでちがう村へいってくれや。」

「なぜですか。いやです。」

「お前がおったらめいわくやからや。」

「わ、分かりました。」

■吉村■

「おにさん、もうかえってください。」

「どうしてじゃ。」

「おにさんがいたら、りょうにでもさかながなかなかとれないんじゃ。」

「分かった。」

■畑中■

そのあと、じいさまがねているときに、おにはじいさまをたべた。そして、おい出される。

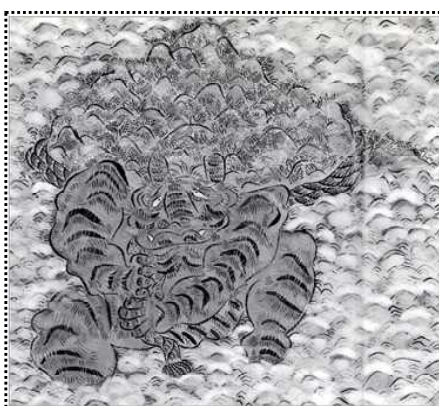
■下谷■

おにがねているあいだに、じいさまはこっそりおき、島の村人全員で島をおして行って、おにを海へつきはなしていった。次の日の朝、おにはびっくりして、なみがうなるようにならない。



おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その6)



おに

「つぎのあさ、おにがまだねむっているうちに、じいさまはかくしもってきたいぬのほねを、ねどこにいれて、にげかえった。」

「目をさましたおには、こしがぬけるほどおどろいた。にんげんなどたべたこともないのに、じいさまのかわりには、ほねがねていたんじゃない。」

「わしがたべたんじゃない。わしがたべたんじゃない。」

「おにがつのをかきむしってうなっぺおると、じいさまのむすこがやってきた。」

「じいさまのほねをもらいにきました。」

「むすこは、おにをにらんだ。」

「ほねはあるが、わしがたべたんじゃない。」

「おには、なきそうなかおでいった。」

「それじゃ、おおかたねているうちに、まちがえてたべたんじゃろう。やくそくどおり、どうでもでていってもらいましょう。」

「こうしておには、また、島をひっぱって、うみのなかをあるきはじめた。」

「あっちの村でも、こっちの村でも、あそんでくれるものはいなかった。」

「ひがしの島では、」

「おにはそとー」

「子どもにிரりまめをなげつけられた。」

「にしの島では、」

「みなみのほうのうみへいけば、おにとにんげんがいっしょにくらせるところがあつた。」

「おにはいっぺにいわれた。」

「おにはいつのまにか、うみのなかをおきへおきへどあるいていた。」

実際の物語は、子どもたちの想像を超える残酷さでした。ここで、子どもたちの立ち位置が一気に鬼の側に動きます。

■奥村■みんながおにのことをうたがっているから、よっぽどこわがっていると思います。ちよっとやりすぎだから、もうち

よっただけあそんであげたほうがよかったと思います。

■皿木■うきやーヒドイ。おには、たべたりはしないって言ってるじゃん。あそびたいだけなんだし、さいしょから「おには悪いヤツ」「おには人間をたべるヤツ」なんて決めつけなくていいと思う。あそんで、「バイバイ」でいいじゃない。げきおこだあああ。さすがにそれはないでしょ。やってもないコトやったってコトにするの、よくないよー。あ、でも、村人さんたちって頭いいね、よくないコトだけど。

■下谷■村人はつみをなすりつけているし、おにはなにもわるいことしてないし、ずるいと思いました。もうちょっと、おにとはっきり相談したほうがいいと思いました。もしかしたら、おにと共ぞんできて、生活がゆたかになるかもしれません。一度だけでも相談してみたらどうですか。「おには村人を食べるこわいヤツ」なんて決めつけないでください。

■中井■おにはこわいから、すごしたくないのは分かるけれど、さすがにここまで「あそびたい、あそびたい」と言っているの、ちょっとでもいっぱいあそんであげたらいいと思います。

■畑中■村びとたちが、おにがたべないと言っているのに、ほんとうにたべるんだと思って、しんじなかつたのがだめだと思った。

■牧志■

村びとは、とつてもいじわるで、だましてばっかりだから、1日ぐらい遊んであげてもいいじゃないかと思う。じいさまが活着ているのを村びと全いんしっているのに、じいさまのむすこがほねまでとりにきているのもうそで、おにはなきそうなぐらいうなっているの、すこしあそぶのをかんがえてあげてもいいんじゃないかなーと思います。私だったらかんがえてあげます。

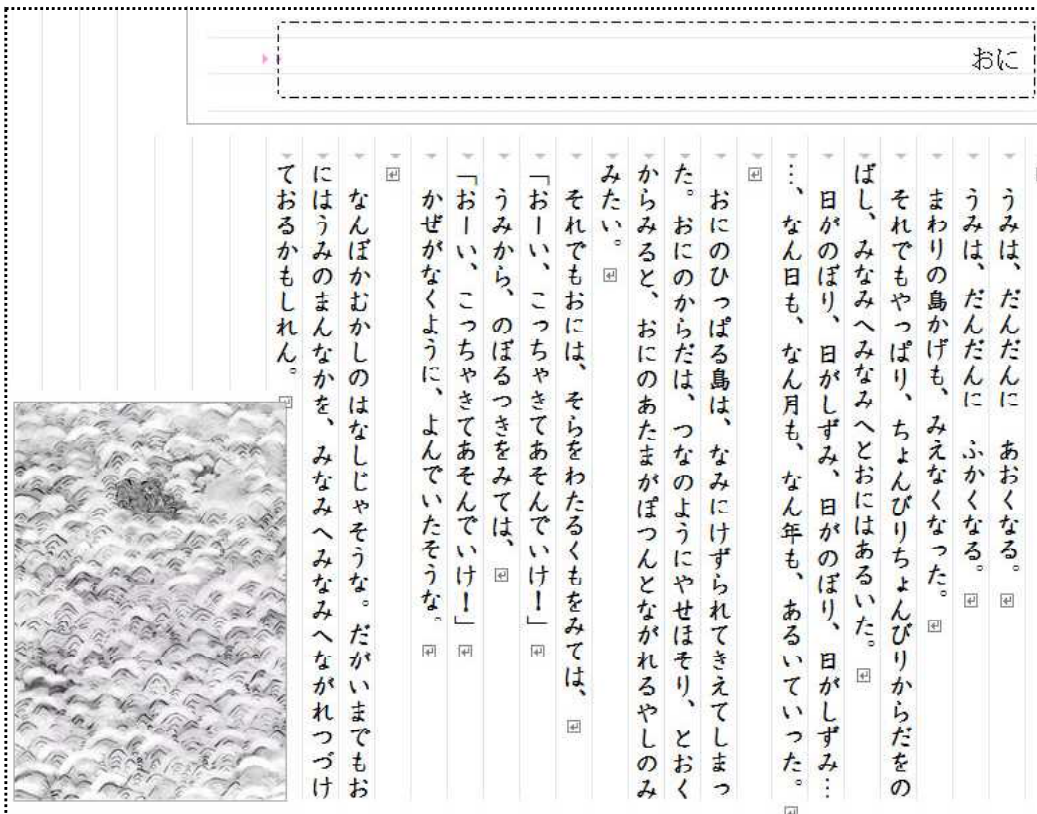
■吉村■おにはこわいからいっしょにくらしたくないのは分かるけど、おにが「あそんで」と言っているから、すこしの時間でもあそんであげたらいいと思う。

中井さんと吉村くんは、ちょっとばかり鬼に同情的になってきました。畑中さんは、鬼の言葉を信じなかつたのが「だめだ」と言い切っています。下谷くんも「決めつけ」を批判し、鬼と村人の「共存」の可能性にまで言及し出しました。ーなかなか核心を突いてきました。でも、このまま子どもを褒めてスンナリ終わらせないのが、草尾の真骨頂。物語は次が最終場面、授業通信はもう少しつづきます。おつきあいください。



おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その7)



最終場面を読み終えて、子どもたちは鬼宛てに手紙を書きました。特徴的な4つの手紙を紹介します。

■畑中■かわいそう…という《同情型》
おにさんは、いつも「こっちゃきてあそんでいけ」と言うけど、みんなあそびにきてくれないから、

かわいそうです。よんでもきてくれないし、あそんでもくれないのもかわいそうだと思います。

■下谷■そのうちに…という《社交辞令型》

なんどもおいだされたけど、あきらめなく、あそんでくれると思いいあるいたおに。とてもさいごは悲しいけつまつだったけど、がんばってあるいたおにが、ぼくはゆうかんだなと思ったよ。まあまあ、そうあわてずにゆっくりゆっくりさがしていこう。そのうちに、きっとイ島があると思うよ。まあなんとかなるさ。とにかくがんばっていこう。

■中井■だれか…という《他力本願型》

だいじょうぶですか？今お話を聞いて、すごくかわいそうだと思います。だれかごしんせつな人がいたらいいですね。でも、なん日もなん月もなん年も海の中を歩いていることがすごいとびっくりしました。島の人々といっしょにあそべなくて、村人たちもひどいですね。だれかごしんせつな人がいたら、そこでゆっくりあそんで、ゆっくりと休んでくださいね。

■皿木■私が…という《問題解決型》

なんどもおいはらわれて、つなのようにやせほそっても海の中を歩くおにさんを見て、なきそうです。すごくかわいそう。でも、だいじょうぶ。そんなおにさんは、私の住むこの町に来て！いっしょにいっぱいあそぼう！そのときは、私をもちあげて、空にとどくようにしてね。まっています。

もとより、正解のある「問い」ではありません。比較する問題でもありません。興味深

いのは、現実の世界でのその子の「今」に近い心情が綴られていると感じられることです。心の「ものさし」は、実体験や読書による経験値によって規定されているのです。

さて、国語の授業としての「島ひきおに」はここまでです。このあとは、道徳の授業になります。もう一度、子どもたちに揺さぶりをかけてみます。



おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その8)

子どもたちに、2つの「問い」を出しました。

おには、どうして村人と一緒に暮らせなかったのでしょうか。【原因】

- 奥村■おにさんは人のいやがることをしているからみんなにきらわれるんです。
- 皿木■やっぱりおには、こわいイメージや、人間を食べるイメージがあるから、おいはられるんだと思う。
- 下谷■やっぱりオニは人を食べる、おそろしい、村をあらすというイメージがあったからだと思う。
- 中井■おにはこわいから、食べたり、らんぼうなことをすると人々が思っているからです。
- 畑中■おには、みんなにこわいと思われているから、いっしょにすむことができないんだと思います。
- 牧志■やっぱりおには、本の中でもわるいものの役だから、村人は、悪いことをされると思ったんだと思う。
- 吉村■おにはこわいものだと思っているから、村人といっしょに暮らせないと思う。

奥村くんは、「鬼一般」について考えたようです。それ以外の子どもの【原因】の答えは、ほとんど同じ内容でした。これは、「島ひきおに」の文章を深く読み解いている証です。

どうすれば、おには村人と一緒に暮らせるでしょう。【解決策】

- 奥村■たとえば、人々のくらしている島をひっぱって旅行につれていったり、はたらいったり、てつだったり、助けたりしたらいいと思います。また、しらんぷりをしたりいやが

ることをしてはどうにもならないから、みんなをよろこばせてあげたらいいと思います。
■皿木■「おーい、こっちやきてあそんでいけ！」とさげばずに、やさしい顔をして、「たべたりなどぜったいしないから、あそんでください。たべないとやくそくしますから。しんじてください。」と言ったらいいと思う。おには体が大きいから、雪がつもっていたら大きな雪だるまをつくってあげたり、子どもたちにかたぐるましてあげたりとか、おにだからこそできるあそびをしたら、よろこんでくれると思う。

■下谷■なにかイことをする。たとえば、だれかが海でおぼれていたたらたすけてあげたり、その島を活性化させるために、その島にきょうみがある人をつれていってあげたらいいと思う。

■中井■だれかを食べたらこの島から出ていくやくそくをすればいいと思います。

■牧志■おにはやさしいけど、村人はそう思っていないから、やさしくしたり、かわりに魚をとってあげたりしたら、村人もやさしいと思ってくれると思う。それでもだめなら、力づくでももっともったいいことをすると、村人もおにといっしょにくらしてもいいと思うと思うし、私も、友だちがほしいからやさしくしているんだと思います。

■吉村■村人たちにルールを作らせて、そのルールをまもったらくらせると思う。

【解決策】についても、非常に近い内容のことが書かれています。善し悪しの問題ではなく、ここから読み取れることは、子どもたちの思考過程であり、問題解決力です。現実の世界において、友だち関係などで問題のある状況に出あった時、子どもたちはこういう態度をとり、対応をするということです。

子どもたちの答え、みなさんはどう思われますか。



おうちの方へ特集号

「島ひきおに」授業通信(その9)

「島ひきおに」の最終授業の記録です。前時の【原因】と【解決策】について吟味します。

子どもたちの考える【原因】は、「鬼は怖い」という“イメージ”です。「島ひきおに」の場面を振り返り、このおには何ら悪いことも怖いこともしていないことを確認しました。そして、この“イメージ”は、「ももたろう」のオニや「一寸法師」のオニ、節分のオニなどによって作られたものであることを突き止めました。授業通信の最初の号に「ステレオタイプ」のことを書きましたが、それがまさにこの部分なのです。

そこで、私は、「このお話のオニが村人と一緒に暮らせないのは、オニのせいかな？」と訊きました。子どもたちは、即座に「ちがう」と答えました。「では、何が原因かな？」と再び問うと、「村人の思い込み」「決めつけ」だと言いました。――すばらしい思考力です。

いよいよ、【解決策】についてです。

再び「島ひきおに」の場面を振り返り、おには悪いことをしていないどころか、むしろ優しく親切に振る舞っていることを確かめました。「きみたちは、こんなおにに、さらに優しくしろ、親切にしろと言うんだね。」と言った後、こう加えました。「それにしても、他のおにによってできてしまったイメージのために“こわい”と決めつけられ、それを取り除くためにもっともっと努力しなければならないなんて、なんだかへんだね。」…このハナシはここまで。ボールは投げても、深入りはしません。

さて、みたび物語に戻って、おにが村人に近づこうとアクションを起こしても、村人たちはその都度、おにの接近を拒んできたことを確認しました。そして、「この状況で、きみたちが言うような親切や人助けができるだろうか？」と尋ねました。子どもたちは、「無理と思う。」と答えました。

そこで、「一体、どうすれば一緒に暮らせるようになるのだろうか？」と、出発点に戻って問いました。しばらく考えて、皿木さんが口を開きました。「村人が変わればいい。」詳しい説明を求めると、「村人の思い込みや決めつけのせいで一緒に暮らせないのだから、村人が思い込みや決めつけをなくせばいい」ということを話してくれました。――そのとおりです。大人は頭で理解していますから「当たり前」かもしれませんが、子どもの思考がここに辿り着くのはとても難しいことなのです。黒板に図示して、復唱して、…さてどれくらい共有できたでしょうか。

ここで終わるととてもきれいな授業になるのですが、草尾流「ツッコミ」はさらに続きます。

「村人の“決めつけ”や“思い込み”が、おにの優しいところも、本当は遊びたいだけなんだということも、見えなくしてしまったんだね。」

「ところでさ、『島ひきおに』の最初の時間、ウソの文を探したよね。その時、『オニは怖いものだから』という理由で、『さびしかった』はあり得ないと考えた人がいるだろ。」

「きみたちが『オニは怖いものだから』と考えたのと、村人たちが決めつけたのと、一緒だと思わないか…。」

――やはり深入りはしません。投げたボールの受け止め方は、人それぞれでしょう。それでいいのです。実生活で、ステレオタイプによる「思い込み」や「決めつけ」に出合う場面が必ず来ます。その時、自分の態度や行動を決める際に、思考の片隅にでも甦ってくれたら教師冥利に尽きるというモノです。

(end)

授業のきっかけは、節分句会だと書きました。節分を詠んだ子どもの俳句に登場したオニは、案の定、「怖い」「悪い」オニたちでした。その時の通信に、こんな一文を載せました。

「鬼は内」のはなし

節分の豆まきは、「福は内、鬼は外」だと思っているでしょう。でも、「鬼は内」と言うところもあるのです。奈良県を例に3つのパターンを紹介します。

- 奈良市の元興寺^{がんこうじ}では、寺に元興神(がごぜ)という鬼がいて、悪者をたいじするという言いつたえがあるので、「鬼は内」。《鬼をまつているのでおい出さない》
- 吉野町の金峯山寺蔵王堂^{きんぶせんじざおうどう}では、全国からおわれた鬼をむかえ入れ、仏の力で心を入れかえさせるので、「鬼も内」。《鬼をいいモノにかえる》
- 天川村の天河神社^{てんかわ}では、鬼は物事を正しく見る力があるとされているので、鬼をむかえ入れて「鬼は内」。《鬼はもともといいモノ》

「オニ」は悪者の代表みたいに言われますが、いろいろな見方があるのですね。

『ないた赤おに』のオニも心やさしかったですよね。

鬼は、人がつくった想像上の生き物です。いったい、どこにいるのでしょうか。あんがい、自分の心の中にすんでいるんじゃないかと、ぼくは思っています。

かくして「島ひきおに」の授業に至ったのですが、この教材にはちょっとした思い入れと、深い思い出があります。

古い話になりますが、1991年に改訂された『なかま 3年』に掲載された「島ひきおに」の教師用指導書(1993年刊行)は、私が担当しました。2002年改訂の『なかま 小学校中学年』の教師用指導書でも、その文章が一部省略してほぼ原文のまま使われています(2002年改訂版では高学年を担当していたので、この時のいきさつは分からない)。テキストのページや行の数字は照応できませんが、92年に書いた指導書原稿を紹介します。

3年 「島ひきおに」

1. 教材設定の意図

学級のなかには、さまざまな「問題」を持つ子どもがいる。それは、いわゆる「障害」であったり、乱暴な行為であったり、大声で泣き叫ぶ行為であったり、寡黙であったり、家庭状況であったりする。しかし、正確に言うなら、ここに列挙したようなこと自体が「問題」なのではない。「問題」の多くは、まわりの無理解や先入観に起因する。

絵本『島ひきおに』の「はじめに」で、作者は、「いつのまにか自分が鬼になっていました。私の最初の心のうずきは、孤独だったと思います。だれにも遊んでも

らえぬ昼さがり、泣いてかえる白い道—そして、今日までこの孤独と愛の問題をひきずりながら、『島ひきおに』のように歩きつづけてきたような気がするのです。」と、述べている。学級のなかで「問題」だと思われている子どもに、この「おに」を出会わせたい。彼・彼女の心の琴線に触れ、閉ざされた扉を開いていける出会いにしたい。

学級の多くの子どもたちは、作品における「村びと」の立場にある。彼ら・彼女らに望むことは、二つある。

鬼はマイナスの存在として語られることが多い。しかし、恐ろしい鬼がどこかに実在しているというわけではない。人々は自分たちと異質なものを鬼という「虚像」のなかに描き、排除し、時に攻撃してきたとは言えないか。ところで、『島ひきおに』は、「おに」が心優しい存在として描かれているという点で、日本の児童文学の中では稀な作品である。子どもたちは、この「おに」と出会うなかで、恐ろしいという「虚像」ではなく、仲間を求めつづける純粋な「実像」に触れるだろう。「おに」の気持ちへの理解を通して、学級の中で「おに」にされている仲間の気持ちを考えていってほしいと思う。

二つ目には、「村びと」の問題である。「おに」の思いを知れば知るほど、「おに」を避け、あるいは騙していく「村びと」への憤りが強くなるだろう。この憤りを、同時に内なる「村びと」に向けさせたい。自分（内なる「村びと」）が仲間（内なる「おに」）をどう見てきたのか、どう接してきたのか。まさに、自身の生き方を問い直す営みに向き合わせたい。

いずれにせよ、集団の質を問われる作品である。教材は文学の読みの学習になるが、子どものつながりの高まりのなかで、劇化や図工の共同制作などに発展させていきたい。

2. 教材の焦点

①仲間と一緒に暮らしたいという願いが分かってもらえず、誰にも受け入れてもらえない、「おに」の悲しさ、辛さを読み取る。

②外見と予断から、「おに」を少しも理解しようとせず追い出した「村びと」について、感想、意見を持つ。

③「おに」や「村びと」を通して、自分や自分の周りを見つめ直す。

以上3点を、この教材を学習する目標としたい。

「おに」と「村びと」の様子や心情を表す言葉を手がかりに、読みをすすめていきたい。まず最初の部分では、広い海の真ん中でひとりぼっちで暮らす「おに」、鳥や船にさえ「おーい、こっちやきてあそんでいけ！」と呼びかける寂しい「おに」の様子や気持ちを読み取る。それと対比する形で、漁船が島にやってきたのを見た「おに」の喜びを読み取りたい。

59頁3行から61頁終わりでは、「りょうし」と「おに」の心のズレに焦点を当てて読みたい。びっくりして命乞いする「りょうし」と、一緒に暮らせる方法を

尋ねる「おに」。とんでもないと口から出まかせを言う「りょうし」と、心からお礼を言う「おに」と、いった具合に。

62頁は、「おに」が引っ越しの準備をする場面である。人間と一緒に暮らせるという希望や期待を膨らませながら、3日間で準備を済ませ、島を引いて歩いていく「おに」の様子や気持ちを考え合いたい。

63頁から65頁2行目では、ようやく浜辺の村まで島を引っ張って行き、「おーい、……」と呼んだ「おに」の気持ちを、まず考えたい。そして、何とかして「おに」に出ていってもらおうとする「村びと」と、気持ちが分かってもらえず足を踏みならず「おに」の様子や気持ちを読み取る。足を踏みならず「おに」の思いは、特にていねいに読みたい。

65頁3行目から67頁5行目は、「おに」がべつの村へ辿り着いた場面である。「おーい、……」と呼ぶ「おに」、じいさまを迎えた「おに」の様子や気持ちに焦点を当てて読みたい。

67頁6行目から68頁終わりでは、自分が食べたのではないことを訴え続ける「おに」の思いに迫る読みをしたい。そして、事実を知りながら「おに」を追い出そうとする「村びと」について意見を出し合いたい。

69頁から72頁では、①島を引っ張りながらあちらこちらをさまよう「おに」と、受け入れようとしない「村びと」、②深い海のなかを島を引いて何年間も歩く「おに」、③綱のように痩せ細ってもなお、雲や月に「おーい、……」と呼ぶ「おに」の様子や気持ちを読み取り、感想や意見を出し合いたい。

ラストシーン（72頁3行目から）の「なんぼかむかしのはなしじゃそう。だがいまでもおにはうみのまんなかを、みなみへみなみへながれつづけておるかもしれん。」という文章は、子どもたちに内なる「おに」、内なる「村びと」と向き合わせる。まさに、自分自身の生き方が問われる部分である。深く自分やまわりの仲間を見つめ直させたい。

3. 教材の解説・資料

「島ひきおに」は、山下明生（やました はるお）氏の作品で、1973年に梶山俊夫氏の絵による絵本として、偕成社より刊行された。

山下明生氏は1937年東京に生まれ、幼少年期を広島県能美島で過ごした。海育ちの海好きで、『かいぞくオネション』『いきんぼの海』『ふとんかいすいよく』『うみをあげるよ』『はまべのいす』『海のコウモリ』など、海を舞台にした作品が多い。

「島ひきおに」の作品については、絵本の「はじめに」で次のように述べられている。「私のいなか、広島県の能美島のすぐそばに、敷島という無人島があります。もとは引島とよんでいたそうです。鬼が引っぱってきた島だから、引島といったんだと、私は小さいときからきかされました。いかにも鬼が引っぱってくるにふさわしい、周囲数百メートルの小島です。

私はこのいつたえが好きで、たびたび小舟をこいでこの島にわたりました。島

のてっぺんには、何をまつているのか、古ぼけた祠がありました。きこえてくるのは、波の音、沖をとおる船の音、松の梢をすぎる風の音。

そこは、孤独がしんしんと身にしみる霊場でした。私は祠の前に腰をおろし、島をとりかこむ海をながめながら、この島を引っぱってきたという鬼のことを想像しました。いいつたえでは、鬼はここで力つきて、死んだというのです。しかし、私はこの鬼を死なせたくなくて、自分の空想のなかで、どこまでも海をあるかせました。何しに行くのか、どこまでいくのか考えながら、いつのまにか自分が鬼になっていました。(以下、教材設定の意図の引用文に続く)「おに」はまさに作者自身だと言えるし、作者の思いが作品のなかで見事に形象化されている。

1986年、続編として『島ひきおにとケンムン』(偕成社)が出された。「はじめに」には、こうある。「人はたいてい心の中に“さびしいおに”をもっています。

わたしの心の“島ひきおに”も、…略…ひとりで海を歩いてきました。なん年もなん年も……。『ケンムンのはじまり』を本で読んだとき、わたしは、島ひきおにを彼にあわせてやりたくなりました。」それから7年後の作者の奄美大島再訪の旅ののちに、この作品は生まれた。同じ“さびしさ”をもつが故に通い合う、島ひきおにとケンムンの心。そして、悲しい別れと、ひとりで海を歩いていくラストシーン。「島ひきおに」とあわせて使いたい作品である。

「島ひきおに」の教材観は、私の同和教育との向き合い方そのものだと言えます。部落差別が厳然として在る中で、部落差別と向き合う姿勢を教えられました。その延長線上に、問題のある子どもと周りの子どもたち、つまり個と集団をどう捉えるかという問題がありました。「島ひきおに」に出てくる「おに」と「村人たち」の問題は、目の前にいる子どもたちの姿と完全に重なっていました。

最初に「島ひきおに」の授業をしたのは、1986年のことです。障害児学級担任として入り込みをしていた3年生のクラスで、国語の授業を担当していました。

そのクラスにカマダくんという男の子がいました。冒頭場面の授業で、ひとりぼっちのおにの寂しさを読み取っていた時、カマダくんは、「おにのつらい気持ちがよく分かる。ぼくも、学校からの帰り道が遠いと思ったことが100回以上ある。」と書き込みました。彼は、ややもすればいじめの対象になりがちな子で、あまり自己表現をしない子でした。その子が、「学校からの帰り道が遠いと思ったことが100回以上ある。」と書いたのです。「100回以上」がズシンと胸に響きました。担任教師と、彼が楽しいと思える学級にしなければと話し合ったことを覚えています。

その彼の、「おーい、こっちやきてあそんでいけ」の音読は絶品でした。それは、おにのことばであると同時に、彼自身の叫びでもあったからだと思います。

時が流れて、今回が2回目の授業です。

当時も今も私の教材解釈は変わらないのですが、当時に比べると今回はツッコミが浅か

ったなあと感じています。授業者のトシもあるでしょう。社会の変化というのもあるでしょう。さらに、子どもの感じるチカラ、考えるチカラの弱さもありそうです。この「弱さ」については、社会的要因と当該学校文化の相違の両方に起因すると思いますが、どちらが主因なのかは判然としません。

いずれにせよ、このような、国語なのか道徳なのかよく分からない授業は、「化石授業」と揶揄されそうです。私にとっては、得意な授業パターンなのですが。

「島ひきおに」以外では、「おらたちにゃ口はねえだに」「しばてん」（以上の3作品は、古い『なかま』に載っている）、「ばんざいじっさま」「おこんじょうり」「ふたりのデェデラ坊」「くびなしほていどん」「かっぱのめだま」（以上5作品は、さねとうあきら作）などで同様の授業をしたことがあります。

最近の授業スタイルと比較して振り返った時、これらの作品にはある特徴点が浮かび上がってきます。それは、今風の授業に馴染みにくいという特徴です。これには少しばかり説明が必要かと思えます。

「最近の授業」とか「今風の授業」とよんでいるのは、ここ数年の私が、文学教材の授業をする時に通常行っている授業スタイルのことです。これは、筑波大付属小の白石さんや桂さんの影響を大きく受けたもので、その1つに「一文要約」があります。「一文要約」というのは、文章全体を「はじめ〇〇だった●●(中心人物・主人公)が、△△(事件・出来事)によって、××になった話」のようにワンセンテンスに要約する活動です。「中心人物」とは、物語の中で最も大きく気持ちが変化した登場人物です。最も大きく気持ちが変化する場面が、「クライマックス」場面です。――これによって、物語の骨格を掴むことができます。私は、そこから読みの指導計画を立てます。

ところが、「島ひきおに」の主人公であるおには、ひとりぼっちで寂しいおにとして登場し、事件・出来事の後もひとりぼっちで寂しいおにとして終わっていきます。

「しばてん」の主人公である「しばてん＝太郎」は、最終場面において犯人に仕立てられ、捕縛されて去って行きます。「ばんざいじっさま」の主人公である万造じいさんは、村人たちから石礫を投げつけられ、一人宮^{きゅうじょう}城に向かってバンザイをして死んでいきます。

いずれの作品も、ハッピーエンドにはならないのです。孤独なまま、理解し合えないまま、“後味悪く”終わって行きます。“後味悪く”感じるのは、物語に出てくる「村人たち」の中に自分の姿を見るからに他なりません。――どうもこれらの作品を「一文要約」というのは無理がありそうです。

さねとうさんは、著書の中で「民衆の差別意識」「民衆の戦争責任」ということを繰り返し問題にしてこられました。「民衆」は、多くの物語では「村人(村人たち)」として描かれています。さねとうさんは、ハナから主人公ではない「村人たち」の問題をテーマにしているのです。「島ひきおに」の山下さんや「しばてん」の田島さんも、作品の「はしがき」などで「胸の疼き」に触れています。「胸の疼き」というのも、主人公ではなくその他大勢である外縁の問題です。――そうした作品であるからこそ、国語のような道徳の

ような授業が成立したとも言えるし、『なかま』や『にんげん』の教材たり得たとも言えるでしょう。道徳の教科化の動きなどを見ると、こうした作品が教材として扱われることはますます少なくなりそうです。しかし、「化石」にしてしまってはならないと、私は考えます。